

1 伝統行事としての「鯉のぼり」遊泳

日本では「鯉のぼり」が掲揚されてきたのは江戸時代の中期ごろになってからである。しかし、「鯉のぼり」は奈良時代からの「端午の節句」に起源がある。奈良・平安時代では、「端午の節句」に菖蒲やよもぎなどの植物によって邪気を祓うことによって無病息災を祈る宮廷行事が行われていた。例えば、軒に菖蒲やよもぎを挿したり、冠に菖蒲を飾ったり、菖蒲の葉で薬玉を作って柱に下げたりしていた。鎌倉時代では、菖蒲を尚武と解し、特に武家では男児の立身出世と武運長久を願い、兜や太刀を贈るようになった。さらに、室町時代では丸太や棒の先に招代^{おきしろ}などの神様を呼び寄せる目印を付けた幟を立てたりした。また、民間においては菖蒲湯、菖蒲酒、菖蒲枕などの風習が盛んになされた。江戸時代には、將軍家を含めて武士たちが世継ぎの子どもの重要な行事として武者のぼりや作り物の槍、薙刀、兜などを立てて盛大な行事をおこなった。民間においても男子誕生を祝う作り兜や武者絵などの幟を立てたりした。江戸時代中期に武士の幟に対して商人らが吹流しを掲揚するようになり、吹流しに鯉の滝登りなど絵が描かれたりした。歌川広重は、「水道橋駿河台」の鯉のぼり風景を浮世絵として描いている。なお、文献上では、1745年刊行「俳諧続清鑑」の「枯木の杜にさわぐや紙幟」の挿絵として利用されている。このように江戸時代中期ごろから現在の鯉のぼりに変容してきたのである。



写真1「俳諧続清鑑」1745年

明治10年に「お雇い外国人」として来日したエドワード・S・モース（1838-1925）が収集した当時の日本人の生活に関するコレクションに鯉のぼり掲揚の写真がある。明治時代には長屋の多くの家が真鯉や緋鯉の鯉のぼりを掲揚しているように日本の伝統行事として定着していたと言える。さらに、昭和時代に戦後



の日本の発展を期して開催された東京オリンピックにおいて黒・赤・青・黄・緑の5色の鯉のぼりが作られたことから昭和30年代から昭和40年代に日本の伝統行事として継承されてきたのである。最近では個々の家なされていた鯉のぼり活動が地域の建物、公園、谷などに数多くの鯉のぼりが掲揚されたりして、地域の人々の連帯意識の形成や地域観光の企画として行われている。その典型活動として、明治時代からの鯉のぼり生産地で、生産量全国一位の埼玉県加須市では、市民による町おこしとして全長がジャンボ

写真2長屋の鯉のぼり こいのぼりが5月3日に掲揚されている。

2 国際交流としての「鯉のぼり」遊泳

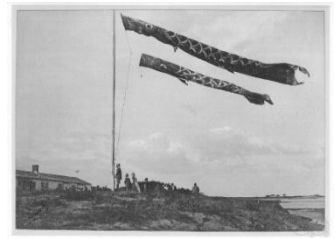
世界で泳ぐ「鯉のぼり」の始まりは、1873年5月1日から10月31日まで開催されたウィーン万国博覧会である。明治政府として最初に参加した万博博覧会場の本館にて、陶磁器（伊万里・瀬戸・九谷）、美術工芸品（浮世絵・扇子・七宝・象嵌・金銀細工）、織物や素材（西陣織・生糸）、紙の張抜（金鯰・鎌倉大仏）な

どが展示された。この会場敷地に建設された日本庭園の左側面に旗柱が建てられ、「鯉のぼり」が掲揚された。



さらに、1893年5月1日から10月3日までシカゴにて開催されたシカゴ・コロンブス万国博覧会の日本館正面に掲揚されたことも指摘できる。この日本館は平等院鳳凰堂を模して建設された。鳳凰殿は3棟の建物で、正面は江戸時代
写真3 ウィーン万博の日本庭園
の大名邸宅、左側は平安時代の貴族の館、右側は室町時代の書院と茶室を併せた建築様式になっていた。正面の大名邸宅の両側の旗柱に「鯉のぼり」が掲揚された。日本の万国博覧会参加には、近代国家として日本が世界の国々との交流を推進し、開国の際の不平等条約撤廃を視野に文明国日本を世界に示すことも意図されていた。

世界の「鯉のぼり」遊泳において国際交流を視野に入れた特記すべき事実として、1919年頃に当時のフランス首相であったジョルジュ・クレマンソー(Georges Clemenceau)がサン・ヴァンサン・シェル・ジュールの別荘に「鯉のぼり」を掲揚し、その後も「鯉のぼり」が掲揚されていることも注目される。1919年1月から第一次世界大戦の終結対応を討議するために開催されたパリ講和会議に参加したフランス首相ジョルジュ・クレマンソーに日本の代表者である西園寺公望(1849-1940)が「鯉のぼり」を贈呈した。クレマンソーは「鯉のぼり」を気に入り、別荘に旗ポールを建て掲揚したのである。その理由として、西園寺が1871年から1880年まで留学していたソルボンヌ大学での親友がクレマンソーであったこと、さらにクレマンソーは東洋美術、特に日本文化に非常に関心を持っていたことが指摘できる。



お互いに国を代表する政治家になった大学時代の親友が、第一次世界大戦後の
資料4 クレマンソーの別荘
世界平和の実現を話し合う歴史的会議に再会することになった。このパリ講和会議後に国際平和機構としての国際連盟が設立された。その意味では、20世紀初めに世界平和の実現を意図する歴史的会議に介在した西園寺とクレマンソーの親友としての人間関係を起因にして掲揚された「鯉のぼり」は、世界平和と国際交流を図る象徴であると言える。

日本の「鯉のぼり」活動の歴史において国際交流を視野に入れた特記すべき事実は、1934年3月に「国際友好鯉のぼりの会 (International Goodwill “Koi-nobori” Society)」の設立が指摘できる。この会の活動趣旨と活動内容が執筆されている英文冊子には、鯉のぼりの意味や歴史、会設立の背景、会設立の動機、会の活動内容などが記載され、世界の国々の人々に世界平和を希求する会活動への協力依頼がなされている。この会設立には、東北大学法文学部学生であった土井英一(1909.9.17~1933.9.9)氏の構想と活動が牽引になった。なお、英一氏の父は土井晩翠(1871~1952)である。彼は子供のころから世界平和と国際親交に深い関心を寄せていた。中学校時代からザメンホフが世界平和を願って創案した国際共通語のエスペラントを熱心に学習し、手紙や情報の交換によって他国の人々との交流をするようになった。そして、真摯に国を愛することは人間性と平和への愛情を必然的に生み出す思いを抱くようになった。さらに、1931年9月18日の南満州鉄道線路の柳条湖事件を端に日中間で武力紛争の満州事変が起きた状況において英一氏は日本人の真の

こころを世界の人々が正しく理解できる試みの必要性を痛感するようになった。また、英一氏の国際友好の活動に協力していた姉の照子（1906～1932）から亡くなる前に世界平和を祈り、世界の子供たちに「鯉のぼり」を送る活動の助言がなされたのである。

英一氏の国際文通活動において最も親しくなったのが、ドイツのマールバッハに住んでいた小学校校長のヨハネス・シュレイダー（Johannes Schroder）であった。彼とのエスペラントによる交流を深める中で、彼の小学校に真鯉と緋鯉の「鯉のぼり」を送ったところ児童たちが大変に喜び、ドイツの空に掲揚し、多くの感謝の手紙が寄せられた。「鯉のぼり」が子供たちの成長と幸福を生み出す忍耐と勇気を象徴する意味も理解されたことに感動した。英一氏はこの交流体験を通して世界平和を推進するには「鯉のぼり」に象徴されている忍耐と勇気に共通する精神性が求められると強い信念を持ったのである。

このような当時の社会的状況とこれまでの国際交流の活動を踏まえて英一氏が、世界平和を会の使命とする「国際友好鯉のぼりの会」設立を祈念した。しかし、彼は中学校時代から健康を害しており、1933年9月9日に大学在学中に結核のため病死したのである。「国際友好鯉のぼりの会」は、英一氏死亡の翌年3月に彼の構想と活動を永続的に推進するために父の晩翠の支援によって設立された。会の役員として次の方々が参画されている。二荒芳徳（1886-1967）貴族院議員　ボーイスカウト協会会長。姉崎正治（1873-1949）東京帝国大学名誉教授。高楠順次郎（1866-1945）仏教学者。山室軍平（1872-1940）救世軍士官。和田英作（1874-1959）東京美術学校校長。齊藤惣一（1886-1960）YMCA 書記長。杉村陽太郎（1884-1939）前国際連盟事務局次長　イタリア大使。内ヶ崎作三郎（1877-1947）衆議院議員。鶴見祐輔（1885-1973）作家　講演家。賀川豊彦（1888-1960）牧師　作家。芳澤謙吉（1874-1965）前外務大臣。このように当時の著名な政治家、教育者、学者、宗教家、作家などが会議を何回も開催し、協会設立と活動について議論した。そして、平和を託した「鯉のぼり」を英国、仏国、伊国、米国などの多くの子供たちに贈る活動を開始した。

これらの活動によって世界の各地から平和を託した活動の趣旨と「鯉のぼり」活動への賛意の手紙が送付されてきた。このように日本の歴史において第2次世界大戦が始まる社会的状況の中で、世界平和と国際交流の理念を持続的に実現するために「国際友好鯉のぼりの会」が設立され、世界の人々に世界平和を託す「鯉のぼり」を送付する活動がなされた歴史事実自体が驚嘆の事実である。その意味では、「国際友好鯉のぼりの会」の「鯉のぼり」活動は、伝統行事の性格から世界に向けて世界平和と国際親善を図る象徴としての性格を有する文化的役割を担った魁としての意義づけられる。

「鯉のぼり」活動も含めて国際交流が盛んになり始めたのは、1964年4月に海外渡航自由化がなされてからである。日本の経済的発展と文化的関心が強まってきた1990年代以降から日本人の海外渡航が増加し、日本企業の海外進出も顕著になってきた。このように世界の国々の人々との交流が拡大し、進化することに伴って個人、家族、学校、企業、公共団体、政府など多彩な形態で国際交流が進められてきた。このような状況において国際交流としての「鯉のぼり」活動も多種多様な形態で実施されてきている。例えば、1992年に第32次南極観測隊による南極での掲揚。1996年パリコレクションにて日本人デザイナーの「鯉のぼり」ファッションショー。1999年ウィーンのシェーンブルグ宮廷の日本庭園での掲揚。2003年「日仏文化セン

ター」主催の「鯉のぼり」活動としてパリ市内の掲揚。2003年トルコと日本との文化交流として開催された現代美術の展覧会での展示。2007年万里の長城にての掲揚。2012年ブータンにて東日本大震災支援の感謝を込めた掲揚。これらの活動は、「鯉のぼり」掲揚としての活動と「鯉のぼり」に関連する素材やデザインを活用した「鯉のぼり」の関連活動に分かれる。したがって、「鯉のぼり」活動は伝統文化の「鯉のぼり」の掲揚だけでなく、生活文化としての多様な活用がなされてきている。

このような多様な「鯉のぼり」活動の中で国際交流を意図する「日仏文化センター」主催の「鯉のぼり」活動は称賛できる。この活動は、フランス在住の服部祐子氏（パリ日仏文化センター館長）が、世界の子どもの健やかな成長と世界の平和を祈願され、2003年よりフランスにて実施されてきた。氏は「21世紀を担う世界の子供達の明るい将来を願う人道的、文化的事業」として、「日本の子供の日」が「世界の子どもの日」になることも意図してユネスコ本部の支援を受けて実施してきた。パリ市内とフランス地方都市にて「鯉のぼり」を掲揚し、日本文化の紹介と国際交流の様々な活動を実施してきた。このような活動を通して「Koi Nobori」の言葉が、フランスでは「平和」の合言葉となり、国際的祭典として写真5 エッフェル塔を背景にパリの空で泳ぐ鯉のぼり認められてきている。その意味では、「鯉のぼり」は国内の伝統行事や地域イベントとしての活動だけでなく、世界における文化交流と文化創造としての活動であると意義づけられる。



3 グローバル文化シンボルとしての「鯉のぼり」遊泳

これまで「天空に向けて舞い上げよう『鯉のぼり』活動」を実施してきた和文化教育学会は、昨年来のコロナ感染問題に直面することを機に、「グローバル文化シンボル『鯉のぼり』プロジェクト活動」を促進している。和文化教育学会は、平成23(2011)年3月11日の東日本大震災をきっかけに「天空に向けて舞い上げよう『鯉のぼり』活動」を展開してきた。この活動は、山折哲雄前会長のご助言を受け、「地震・津波等の自然災害による社会的危機状況において文化は、どのような役割を担うのか」という問いかけであった。学会ホームページに紹介しているように「鯉のぼり」を各地域の学校園等において「東日本の地域復興と子どもたちの活力創生を祈念して掲揚する企画」（2011年9月 博報賞日本文化理解教育部門受賞）を推進してきた。平成23(2011)年度には震災復興支援として兵庫教育大学にて、平成24(2013)年度からは「東北と世界へ羽たけ私たちの願い」を込めて関西学院大学にて、令和元(2019)年度には「天空に世界の平和と文化交流を祈念して」万博記念公園にて「鯉のぼり」活動を実施してきている。このように東日本大震災を動機に開始した「鯉のぼり」活動の原動力は、震災の被害状況からの復興を図る文化力と共に世界平和を意図して昭和9(1934)年3月に設立された前述の「国際友好鯉のぼりの会」の理念と活動にも関係する。

このような文化力と平和の理念だけでなく、「鯉のぼり」が世界で最初に掲揚されたところが、明治6(1873)年開催ウィーン万博の日本庭園だったことも推進力になっている。その後、明治26(1893)年開催のシカゴ

万博では平等院鳳凰堂をモデルに建築した日本パビリオンの正面に掲揚された。さらに、昭和 45 (1970) 年開催の大阪万博においても「鯉のぼり」が掲揚された。岡本太郎氏も大阪万博の際に鯉のぼりを制作している。令和元年 5 月 1 日に実施した万博記念公園での「鯉のぼり」活動を令和 2 (2020) 年も 5 月 5 日に万博記念公園にて「天空に世界の平和と文化交流を祈念して こどもたちといっしょに こどもたちのために」の「鯉のぼり」活動を実施する予定だった。しかし、コロナ感染の問題で令和 2 年度の「鯉のぼり」活動が中止になった。このコロナ感染が世界中に蔓延していることが、「グローバル文化シンボル『鯉のぼり』プロジェクト活動」の直接的動機である。

コロナ感染の問題は、これまでの平和、環境、災害、人権、貧困、人口などのグローバル問題とは異なり、これらの問題への関心の有無に関係なく、地球上のすべての地域と一人ひとりの私たちも当事者として巻き込まれる問題状況である。この状況については、患者死亡、感染者増大、営業休止、外出規制などの個人的行為の実感的側面からの情報が主である。阪神・淡路大震災や東日本大震災の自然や社会における深刻な人的物的被害の情報とは異なる。その意味では、現状はコロナ感染によって人間の絆に基づく社会的文化的活動自体が崩壊する世界的危機状況であるとの実感が乏しいと言える。そして、見えないコロナウイルスによる被害や障害は、私たち自身の見えない心の世界に醸成され、各々の心の傷口が化膿し多様な形態で世界的危機状況を生み出すと予感できる。特に、児童や生徒たちは発達年齢に応じた教育が中断されてきたので、心身の成長に歪を受ける危惧がある。

このような危機状況への対応としては、未来志向への文化創造的関与を個人的に社会的に創出することが考えられる。この活動のひとつの試みが、これまでの「鯉のぼり」活動と関連する「グローバル文化シンボルとしての『鯉のぼり』プロジェクト」である。この世界の平和と文化交流の理念を目的とする「鯉のぼり」活動を通して多くの人々の絆が縫合されて、新たな社会的文化的活動を創造していくことが、ひとりの人間だけでなく一人ひとりの集団としての人間が共に広くて深い心を形成し、世界を創造する意義を有する。

今後の「鯉のぼり」プロジェクトとして、次の 3 活動実施を主目的とする。

① 2025 年に開催予定の「大阪・関西万博」での「鯉のぼり」活動の実施

この活動は、世界の文化交流の関与を重視し、現在実施している大阪万博記念公園での活動発展と関連する。

② ニューヨーク国際連合本部での「鯉のぼり」活動の実施

この活動は、世界の平和の祈念に関連する。

③ アフガニスタンを含めた発展途上国の学校での「鯉のぼり」活動の実施

この活動は、世界の平和と文化交流に関連する。中村哲医師は、「9 条がバックボーン」の信念を持たれてアフガンで活動をされていた。中村哲医師と、私は同姓同名の縁で面識もあり、ベシャワール会の会員でもあった。中村医師は、学校教育の支援にも関心を有していた。この思いは、アフガニスタンに限らず世界の多くの発展途上国への支援に関連する。

これらの活動の推進によってグローバル文化シンボルとしての「鯉のぼり」活動は、多様な文化創造に挑

戦できる。このプロジェクトは、土井英一氏が提案された「国際友好鯉のぼりの会」の理念を継承すると共に、現代世界の諸課題 SDGs とも関連する。さらに、この文化創造活動のアプローチによって、未来世界の持続的構築を担う意義がある。

このような意義を有する本プロジェクトの始まりの活動が、「鯉のぼり」に個人的社会的な視野からの未来志向を描く試みである。このプロジェクトの賛同者の方々は、初代和文化教育学会会長の山折哲雄先生と二代目和文化教育学会会長の梶田叡一先生を始め、多くの方々からの支援協力を賜っている。このような趣旨を踏まえて本プロジェクトでは前述の主目的を意図して持続的活動を推進している。

本プロジェクトにご協力をいただける場合には、下記の要領で「鯉のぼり」購入によるご支援をよろしくお願い申し上げます。なお、作成鯉のぼりにつきましては、事務局にお送り下されば、毎年5月に開催する万博記念公園（吹田市）での「鯉のぼり」活動にて掲揚させていただきます。

記

プロジェクト支援鯉のぼりの種類と単価

- | | | | | |
|---|----------------------|----|-----|--------------|
| ① | 白い鯉のぼり (70cm) | 国内 | 1 匹 | 300 円 (送料含む) |
| | | 国外 | 1 匹 | \$ 3 (別途送料) |
| ② | カラー鯉のぼり (70cm、青、紫、緑) | 国内 | 1 匹 | 500 円 (送料含む) |
| | | 国外 | 1 匹 | \$ 5 (別途送料) |

ご購入希望の種類と数をメール等で事務局へご連絡下さいますようお願いいたします。なお、10 匹以上のご購入の場合には送料と単価も安くなります。詳しくは、希望者の方にご連絡いたします。

プロジェクト代表者 中村 哲 (和文化教育学会会長、兵庫教育大学名誉教授)

「Mind of Wa」



プロジェクト賛同者 山折哲雄 (和文化教育学会初代会長
宗教学者)



「星座を旅して ファッションショウ」

梶田叡一 (前和文化教育学会会長
前桃山学院教育大学学長)



「空はいつも青天井 頑張ろう!!」

連絡先 〒654-0035 神戸市須磨区中島町 3-1-15 中村 哲

Home Page: <https://www.rawace.org/project.html>

E-mail: kobesuma3@gmail.com